

病院内学級の担当教員との連携による造形教室の取 り組み

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-06-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 智子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007799

病院内学級の担当教員との連携による造形教室の取り組み

高橋智子*

A Practical Report of Arts and Crafts class in Cooperation with Teacher of the In-hospital school in Shizuoka Children's Hospital

Tomoko TAKAHASHI

【要旨】

本報告は、「病弱・身体虚弱教育における造形教材・教具の開発とその活用に関する研究」の一部を成すものである。本研究の一環として、静岡県立こども病院内に設置されている訪問教育「きらら学級」において、担当教員と連携しながら継続的に授業実践に取り組んでいる。実践では、病院内学級の実態を把握しつつ、児童生徒が自らの力で表現する楽しさや喜びを実感できるような造形教材開発及び計画立案を行っている。これまでも様々な造形教材を開発し、実践に取り組んできた。2013年度の実践では、過去に実施した造形教材の中から児童生徒が積極的に取り組んだ「生活の中で飾る楽しさやつかう喜びを感じることができる造形教材」を設定するなど、豊かに想像を広げ表現することの楽しさや喜びを感じることのできる授業づくりを目指した。本稿では、実践の概要及び成果と課題について報告を行う。

【キーワード】病院内学級 造形活動 造形教材開発 授業づくり

1. 本研究の概要

病弱教育において実技を伴う教科は、児童生徒にとって楽しく意義深いもの¹⁾であるとされ、その指導の改善・充実が一層望まれている。先行研究では、全国の病院内学級において、全授業時数に占める図画工作の割合が高いことが示されており、教科の中でもカリキュラム上重視されていることが報告されている²⁾。入院中の児童生徒は、病院という限られた空間の中で、病気と向き合い、治療や検査などに耐えながら、規制のある生活を送っている。また、入院生活が続く中で、病気による精神的不安を抱えていたり、自由に身体を動かさない不自由さから行動が消極的になったりすることもある。入院中の児童生徒が、自己表現の欲求を持っていないわけではない。しかし、このような実態や病気のために、できないことや我慢することが多い環境の中では、児童生徒が自分の思いや感情を思いきり表現したり、「もの・こと・ひと」と出会って感動し楽しんだり、主体的に活動したりすることは容易でない。

太田好泰(2001)は、造形活動においては障害によるできない部分にではなく、その人のできる部分、すなわち可能性に光があてられると指摘する³⁾。また、表現は「言葉」という高度な概念に抛らず、「絵や態度によって、より直接的に感情を示すことが可能である⁴⁾。病弱の児童生徒が可能な範囲で、自分の思いや感情を自らの力で表現し、その楽しさや喜びを学ぶ

ことが造形活動を通して可能となる。また、病弱教育において、実技を伴う教科は、自分の身体を動かし楽しみながら、生活の充実や心理面(情意の成長、社会性の伸長など)の成長などを可能にする⁵⁾。このような特徴を持つ造形活動が、病弱教育の目標のひとつである「学ぶことの楽しさを知り、個々の能力を開花、発達させ、生涯を豊かに生きること」に果たす役割は大きいといえよう。

病弱教育における教科指導においては、児童生徒の病状などを考慮した教材・教具の創意工夫と効果的な活用が必要とされる。一方で、病弱教育において、造形・美術教育の教材・教具の開発に関する研究は少なく、現場の教員は児童生徒の実態に合わせた造形教材開発を手探りで行わなければならない。こうした現状を受け、静岡県立こども病院内に設置されている訪問教育「きらら学級」において、担当教員と連携を行いながら、図画工作科及び美術科の授業の一環として授業実践(「造形教室」または「合同図工」と呼ぶ。本稿では、以下「造形教室」と記す。)に取り組んでいる。実践を通して、児童生徒の身体及び行動に関する特徴や実態の把握、指導方法及び教具開発などに関して検討を重ね、ソフト面としての造形教材の開発及び蓄積を行ってきた。昨年度に引き続き、2013年度も担当教員と連携しながら授業実践に取り組んでいる。本稿では、2013年度の実践の概要及び成果と課題を報告する。

* 静岡大学 教育学部

2. 造形教室の目的

静岡県立こども病院には、病院内学級として訪問教育「きらら学級」が設置されている。「きらら学級」の担当教員は、病院に隣接する静岡県立中央特別支援学校から派遣されており、訪問教育の形態で児童生徒の教育を行っている。学級には、入院中の小・中学生が在籍しながら、教科の学習をしたり、友達と楽しく過ごしたりしている。

「きらら学級」での造形教室実施は、担当教員と連携を行いながら、2006年から現在まで継続している取り組みである。実践は、年2～3回のペースで実施しており、その目的は「入院している児童生徒が、表現活動や鑑賞活動を通して、自らの手でものをづくりだす楽しさや喜びを実感し、生きる喜びを感じる」こととしている。造形・美術教育においては、児童生徒が可能な範囲で自らの諸感覚を働かせながら、色やかたちなどを用いて、自分の思いを表現することが可能である。造形教室では、幅広い造形活動を通して、子どもが「楽しさ」や「喜び」を実感し、そのプロセスを学ぶことで、自分の力で人生を楽しく実現する力をつけることを目的とした。

3. 造形教室の概要

造形教室は、静岡県立こども病院内に設置されている訪問教育「きらら学級」の教室内で実施している⁶⁾。対象は、長期・短期入院中できららに在籍している児童生徒の中で、「きらら学級」に登校可能な児童生徒である。授業は、小学生と中学生が同時に参加する合同授業の形態で実施している。これまで参加が多いときで10名程度、少ない時で2名の参加があった。授業の進行・指導は筆者が中心になり進めているが、「きらら学級」の担当教員やボランティアスタッフとして大学生も参加しており、T・T（チーム・ティーチング）の方法をとっている。

4. 造形教材開発の視点

教員が教材研究及び開発を進める中で、児童生徒の実態把握を的確に行うことはもっとも重要な課題だといえる。特に、病気療養のため入院している児童生徒については入院に伴う制約も多く、把握しなければならない事項は多岐にわたる。「きらら学級」での実践では、担当教員との事前打ち合わせなどを通して、児童生徒の実態や学習環境の把握を行ってきた。また、その実態や学習環境などを加味しながら、これまでに造形教室における造形教材開発の視点（表1）の考察を行ってきた⁷⁾。

5. 本年度の実施計画

表1に示した目的及び造形教材開発の視点を考慮しながら、2013年度は全2回（7月、10月：計4日間）

表1 きららでの造形教材開発の視点

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ○短時間・短い期間で実施可能な題材 ○驚きや発見があり、想像が広がる題材の設定（題材にストーリー性を持たせる、わかりやすいテーマ・目標の設定など） ○かたちや触感の変化が大きな素材や表現方法の選択 ○作品完成の喜びや達成感があるもの ○これまでに出会ったことのない画材・素材や表現方法の選択 ○教室にある材料・用具をいかした題材の設定 ○様々な感覚を使い造形できる素材の選択（触覚・視覚・聴覚・嗅覚・味覚などを刺激） ○身体の動きを補う教材の工夫 ○弱い力で変形が可能な素材や扱いやすい用具の工夫 ○造形活動に必要な基礎基本の丁寧な指導 ○教室の雰囲気を変化させる教室環境、掲示づくりや作品展示の工夫 ○外光が教室に入ってくる環境をいかした教室環境・掲示作り、作品展示の工夫 ○小学校・中学校の合同授業の実施 ○全員の作品が参加できる共同作品の実現 |
|---|

の実践を行った⁸⁾。全2回の実践では、4つの題材を実施した。授業日程及び実施回数については、担当教員との事前打ち合わせを通して決定している。また実施する題材についても、担当教員と相談し打ち合わせを繰り返しながら、吟味を重ねている。実践前には、担当教員から児童生徒に体験させたい活動などの提案が行われ、その提案を活かしながら、実施する造形教材の検討を行っている。2013年度の実践では、過去に実施した造形教材の中から児童生徒が積極的に取り組んだ「生活の中で飾る楽しさやつかう喜びを感じる」ことができる造形教材」をテーマとして設定するなど、豊かに想像を広げ表現することの楽しさや喜びを感じることで授業づくりを目指した。

6. 造形教室の授業概要

全2回の授業概要は、表2に示した。実施した4題材のうち、「生活の中で飾る楽しさやつかう喜びを感じる」ことができる造形教材」は、図1～3である。本稿では、過去に実施した造形教材と比較した改善点や「造形教材開発の視点」をもとに、「授業計画」「テーマ」「材料・用具」「指導・支援」「教室環境」の視点から造形題材のポイントを、図1～3の実践に着目して述べていく。

(1) 造形教材について

・授業計画

授業は、平成25年7月と10月に実施した。午前と午後を合わせて、約2時間の授業であった。「きらら学級」に在籍する児童生徒は、治療中のため体力を消耗しやすく集中力も継続しづらい。また、入退院は流

表2 実施した題材一覧 (2013年度)

回数	日時	題材名	内容	主な材料・用具
①	7/12	風にゆれる夏色モビール	身の回りの材料や用具を用いて、モビールをつくる活動。	木材、滑り止めシート、モール、鈴、モール、糸、フェルト、はさみ など
②	7/19	海の世界はどんな世界 どきどきわくわくサマーバッグ	各自がイメージする海の世界をビニールシートにマジックで描き、そのシートを用いてビニールバッグやキーホルダーをつくる活動。	ビニールシート、マジック (油性)、はさみ、シーラー、金具、綿、ストロー、折り紙、糸、アルミホイル、ビーズ、紙コップ、タフロープ など
③	10/24	きって かさねて はりつけて カケラから広がる光の世界	発泡スチロール板をスチロールカッターで切ったかたちを重ね、接着剤で貼りつけて立体作品 (ランプシェード) をつくる活動。発泡スチロールのパーツを組み合わせて完成した形の内側にLEDライトを設置し、点灯できる作品とした。	発泡スチロール板 (20mm)、スチレンストック (10mm、15mm、20mm)、軽量紙粘土 (小さな球作成用)、スチロールカッター (予備電池も準備)、接着剤 (木工用ボンドを使用)、LEDライト (4灯、W66×D66×H32mm、1個につき、電池3本必要) など
④	10/25	ぐるぐる描く私のかたち 色と形のハーモニー	布にアクリル絵の具で描いて作品をつくる活動。用具には、ローラーやスポンジ、筆などを使用して、ダイナミックに描いていく。偶然にできた形や色を重ねながら組み合わせていく。	布 (綿: 白色、水色、ピンク色、緑色、小麦色)、アクリル絵の具用具一式、描画材 (ローラー、スポンジ、指筆、刷毛など)、新聞紙、ビニール袋、段ボール など

*実施時間は、昼休みを挟み、約2時間の活動を行った (午前: 1時間20分/午後: 40分)

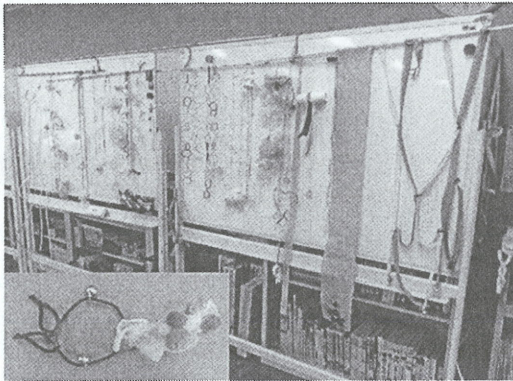


図1 「風にゆれる夏色モビール」 参考作品 (上)
児童作品部分 (左下) / 金魚 (小5)



図2 「海の世界はどんな世界
どきどきわくわくサマーバッグ」 児童作品 (中2)

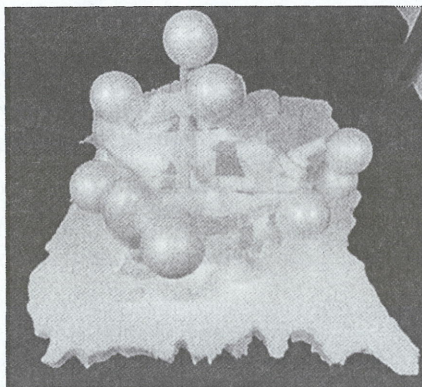


図3 「きって かさねて はりつけて
カケラから広がる光の世界」 児童作品 (小3) 約40cm×40cm×40cm

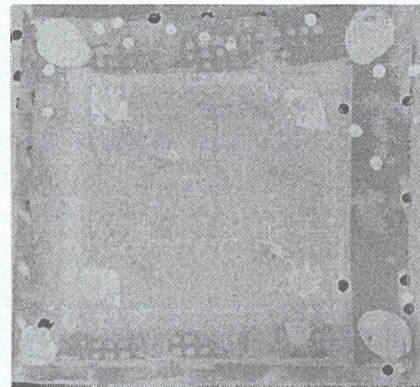


図4 「ぐるぐる描く私のかたち
色と形のハーモニー」 生徒作品 (中1) 約70cm×70cm

動的で予測することが難しく、病院内学級においては短期間・時間で実施可能な題材が必要とされている。以前は、2日間で1つの題材を実施していたが、上記の理由から、近年では1日で1つの題材を実施するようにしている。2013年度も、同様に計画を立てた。

・テーマ

本実践では、季節感を取り入れながら、児童生徒が表現を楽しみ、自分の作品を生活の中で飾る楽しさやつかう喜びを感じることが可能な題材を設定した(図1~3)。過去の題材においても、同様の要素を含んだ題材を実施しているが、その際、児童生徒の積極的な参加が見られた。テーマから「イメージすること」、「イメージをかたちにすること」、「つかうこと」の一連の流れが、児童生徒の表現する欲求を高め、関心意欲の向上につながったのではないかと考える。また、目的(つかう)が明確であるため、作品のイメージを広げやすく、見通しを持ちながら表現することも可能である。本実践でも、同テーマを設定することとした。

実施した題材は、病室に飾れる「モバイル」(図1)や「立体作品(ランプシェード)」(図3)、病棟内を移動する際に使用できる「ビニールバッグ」(図2)である。「モバイル」「ビニールバッグ」は今回初めて取り組むことにした。

「モバイル」は、室内環境(光、風など)に影響され、作品の表情が変化しやすい特徴を持ち、生活の中でその変化を楽しめる題材である。「ビニールバッグ」についても、生活の中で使用することができる。材料にビニールシートを用いた題材例は、過去にも取り組んでいるが(図5)、本実践では児童生徒が「つかう」ことをより意識したため、「ビニールバッグ」の題材とした。また、ビニールシートの透過性は、児童生徒に夏を連想させ、季節感を感じながら作品づくりに取り組めると考えた。さらに、ビニールシート(支持体)にマジック(描画材)で絵を描く活動は、力の弱い病弱の児童生徒でも簡単に取り組むことが可能である。

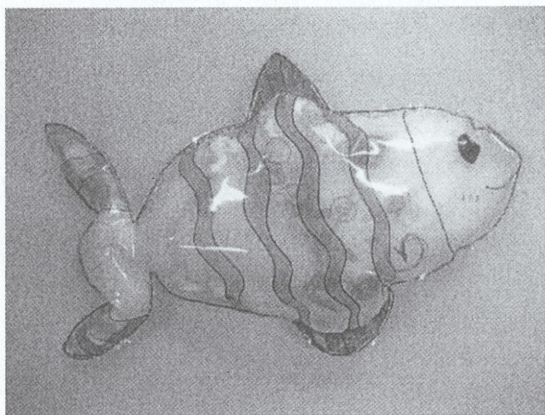


図5 ビニールシートを使用した造形作品
児童作品

「立体作品(ランプシェード)」は、過去にも何度か取り組んだことのある題材であり、使用する材料(発泡スチロール)の色やかたちが雪や氷を連想させるため、冬に実施することが多い。過去の実践では、同材料を用いて「ツリーづくり」に取り組んだことがあった。しかし、このテーマ設定では、作品のイメージが限定的になってしまうため、児童生徒の自由な発想が引き出せなくなるのではないかと懸念された。本実践では「ツリー」に限定するのではなく、様々な作品パターンの出現を期待したため、「光の世界」というテーマとした。季節を感じ、豊かに想像を広げながら表現し、作品を病室や病棟で飾ったり、つかったりして楽しめる題材設定をした。また、「きらら学級」では個人指導が多いため、児童生徒の交流不足が課題としてあがっていた。そのため、個人作品としても、共同作品としても魅力的な題材を設定するように心がけた。図1の題材については、児童生徒作品を並べて展示することで、一枚のタペストリーのように鑑賞することが可能である。図3の題材については、並べて展示することで、単独では出せない奥行きや高さなどのボリュームやLEDライトによる光の調和を感じることが可能である。

・材料用具

本年度使用した主な材料・用具については、表2に示した。主な材料・用具には、小・中学校の教科書や授業でも取り扱われている身の回りの材料・用具を使用することを心がけている。専門性が高く、高価で手に入れにくいものを使用するのではなく、手軽に手に入れることが可能な身の回りの材料を使用した。「モバイル」では、提示方法(材料の置き方)や加工方法(切り方など)を工夫し、材料・用具が持っている魅力を引き出すように心がけた。また、かたちや触感の変化が大きいものや児童生徒が諸感覚(触覚、視覚、聴覚、嗅覚など)を十分に発揮できるような材料を豊富に準備するようにした。「ビニールバッグ」では、児童生徒がバッグの大きさを選択できるように、数種類の大きさのビニールシートを準備した。また、活動時間内に作品が完成できるように、ビニールシートが広くなりすぎないように配慮した。「立体作品(ランプシェード)」では、板状の発泡スチロールの他に、球状と棒状のものを準備した。過去の実践時にも、こうした形状の発泡スチロールを準備したが、本実践ではより大きくボリューム感のある発泡スチロール(球状)を準備した。板や棒の持つ直線的なかたちと球の持つ曲線的なかたちの組み合わせの面白さが、児童生徒のイメージの広がりや活動の促進に繋がると期待した。

また、図1~3の題材では、材料を接着する方法を工夫した。「モバイル」では、材料を組み合わせる主な方法として、モールや糸類(刺繍糸、毛糸、タフ

ロープなど)での結合を提案し、様々な種類(長さ、太さなど)の材料を準備した。「ビニールバッグ」では、ビニールシート同士を接着するために「シーラー」⁹⁾を準備した。図5の題材では、ビニールシートの接着にホットキスを使用していた。しかし、病弱の児童生徒は手や腕などの力が弱いため、ホットキスがおせないなど、活動が制限されることが多々あった。この課題に対しては、児童生徒の活動を補助する教具(補助具)の開発を進めてきている¹⁰⁾。ホットキス用の教具(補助具)については、既に試作が終了し、造形教室で実験的に使用・評価している。ただ、現在も形状や機能に課題が残っているため、改良を重ねている最中である。そこで、「ビニールバッグ」(図2)では、ビニールシートを接着する方法として、実験的に「シーラー」を使用してみることにした。「シーラー」は熱でビニールを溶かすことによってシート同士を接着できるため、弱い力で簡単に接着可能であると考えた。

(2) 指導・支援について

入院している児童生徒は、長期入院や流動的な入院のため、学習の空白や遅れが目立つ。そのため、造形活動に関わる基礎基本(用具の使い方、技法など)について、丁寧に指導を行うようにしている。一斉指導はもちろんであるが、学習形態が学年縦割りの合同授業であるため、個別指導において、授業者や担当教員、学生ボランティアがきめ細かく指導・支援するようにした。

(3) 教室環境づくりについて

造形教室では、教室環境づくりにも工夫を行っている。「きらら学級」に在籍している児童生徒は、入院を繰り返しながら、病院という閉鎖的な環境で長期間過ごすことが多い。病院内は温度管理がされており、児童生徒が温度や湿度、自然の音、匂い、風などの変化により、実感を伴いながら季節の移り変わりを感じる機会が少ない。また、住居空間である病室は、白色系の色で統一されており、無駄がないシンプルな構造となっている。そうした環境下で生活している児童生徒にとって、普段と異なる教室の雰囲気は、造形活動への意欲を向上させてきた。本題材においても、題材ごとに教室内を装飾することで、雰囲気づくりを行った。教室環境づくりでは、タフロープを飾ったり、透過性のある布を天井からつるしたり、題材のイメージに合った写真を掲示したりすることで、夏の海の中や冬の雰囲気を表現するようにした。

各題材では、参考作品の提示も行い、子どものイメージを広げたり、活動の見通しを持たせたりするように心がけた。参考作品については、事前に担当教員が作成したものを複数提示している。

机の配置については、ホワイトボードを中心として、緩やかに弧をえがくようにセッティングした。この配置では、隣に座っている友達の作品だけでなく、色々な友達の作品が見やすくなる。お互いの作品を間接的・直接的に鑑賞しながら、作品づくりへの意欲が高まることを期待した。

(4) 事前教材作成会の実施について

実践前には、担当教員が作品づくりに取り組む時間を設けている(事前教材作成会の実施)。題材ごとに、事前教材作成会を開き、担当教員と授業の目的や題材の概要、指導・支援のポイントなどを確認していった。この取り組みは、実践開始時より取り組んでおり、担当教員の造形活動に対する理解や課題解決の糸口となることを期待している。

7. 造形教室の授業実践の成果と課題

(1) 題材について

・授業計画

時間配分については、4題材とも概ね問題はなかった。「きらら学級」のカリキュラム上、1日の授業時間は、午前1時間20分、午後40分であり、午前中の活動が通常の授業時間(小学校は45分、中学校は50分)よりも長く設定されている。しかし、児童生徒は集中して活動を進めることができた。時間をオーバーしてまで活動を続ける姿も見ることができた。1日1題材の実施は、児童生徒の集中力が継続しやすく、見通しも持ちやすいため、意欲の向上がみられた。午前の時間は、授業者としても時間的な余裕を持ちながら授業を進めることができる。午後の時間については、午前よりも短いため、作品鑑賞会の時間を十分に取ることができないなどの課題が指摘されていた。そのため、本題材では、授業の最後に作品鑑賞会を設定するだけでなく、授業過程において、授業者が積極的に子どもの作品を取り上げ、全体に紹介するように心がけた。2013年度は、「モビール」(図1)の題材において、作品鑑賞会を設けることができた。鑑賞会では、友達や教員の前で自分の作品に対する思いを語る時間を設けた。実施前は、人前で自分の作品について語ることをためらうかもしれないと予想できたが、全ての児童生徒が作品に込めた思いを自分の言葉でしっかりと発表することができた。病院内学級では、友達との交流不足が指摘されているため、こうした鑑賞の時間を授業内に組み込んで行く必要性を改めて感じた。

・テーマ

本実践では、季節感を取り入れながら、児童生徒がつくる行為を楽しみ、自分の作品を生活の中で飾る楽しさやつかう喜びを感じることを可能な題材を設定した。その設定意図は、過去の実践から「つかう」作品に対する児童生徒の反応が良かったと担当教員より報告を受けたからであった。模様を描いた布でバッグをつくった題材では、造形教室後に「きらら学級」に登

校する際、学習道具をバッグに入れて登校する子もいたという。図1～3の題材では、「つかう」がキーワードとなっている。

実践後の担当教員の感想から、「題材に関する記述」と「児童生徒の表れに関する記述」をまとめたものが表3と表4である。題材に関しては、題材設定時のねらい通り、病棟や病室などで児童生徒が「つかう」ことのできる題材への評価が高かった。「つかう」作品をつくる過程では、「つかいたい」という気持ちが大きくなるため、より積極的に活動に取り組む姿を今回も観察することができた。また、作品を病棟や病室でつかうことは、自分一人で楽しむだけでなく、病棟の中で友達、保護者、医師や看護師などとのコミュニケーションのきっかけになっていたことも教員の感想から分かる。作品を通して、色々な人と関わり、自己肯定感を高める題材の魅力を改めて感じることができた。

また、題材テーマには、季節感などを意図的に取り入れた。7月に実施した図1、図2については夏をテーマとし、10月に実施した図3については冬をテーマとした。このようなテーマの設定は、作品のイメージをより明確にし、これまでの経験や病棟の窓越しに見える自然（空の色、光の色など）をもとに想像を広げ、児童生徒が作品づくりに取り組むきっかけとなった。表4からは、活動を通して、造形活動に対する関心・意欲の高まりや自らの手で作品をつくりだす楽しさや喜びを実感している児童生徒の姿、豊かに発想想像を広げている様子などが読み取れる。季節感や用途のある題材を設定することで、児童生徒にとって「つくる」ことが単なる「楽しかった」という体験

表3 題材について

題材に関すること

【モバイル】

- 夏らしい作品で生活の中で使えるのがよいと思いました。
- 完成したら、すぐに持ち帰って他人に見せたり、自慢したり、飾れたりするのが良かった。色々な人に声をかけてもらえることが、この子どもたちにとってはすごく嬉しいこと（大切なこと）だと思う。
- 終業式で作品を展示して、とても夏らしくて良かった。

【サマーバッグ】

- 平面から立体になる作品のため、楽しさが2倍ある。
- 夏らしい作品で生活の中で使えるのが良かった。
- 内側を裏打ちにして、2枚の中に素材を入れてつくることも可能ではないか。

【光の世界】

- いろいろな展開の仕方や行う季節によってもテーマが変えられる題材だと感じた。
- 偶然できた形からイメージを広げていける良さがある。

表4 児童生徒の表れについて

児童生徒の表れに関すること

【モバイル】

- 自分のやりたいことを自分なりにどんどん発展させていった。
- 子どもの想像力の素晴らしさを見ることができた。
- 個性豊かに作品をつくっていた。
- 参考作品にとらわれることなく、独創的に作品づくりに取り組んだことに驚いた。
- 飾り全体にストーリーや世界があって、個性豊かな表現だった。
- 病棟や部屋に飾れる大きさで、見ごたえもあり、「自分の作品」という思いが溢れていて嬉しそうでした。

【サマーバッグ】

- 自分が描いた絵がバッグという使えるものになるという題材が子どもたちの意欲をあげていました。テーマも今の季節に合っていて、わくわく感も高まりました。
- 子どもたちが使えるし、宝物をいれて飾ることもできる点が良い。使える作品であることが、子どものモチベーションをあげていた。
- 使えるものということが、モチベーションをあげていた。
- 作品をすぐに持ち帰れる嬉しさを子どもが感じていた。
- オベ後、不安でいっぱいな子がそれを忘れて活動に取り組む姿が見られて良かった。
- ひたすら集中して描いていたのが印象的であった。
- 独創的に作品づくりに取り組んだことに、びっくりしました。

【光の世界】

- 学年によっても発想や工夫の仕方にも違いがあった。
- 自分のイメージを持ち、それを実現していく過程と作品に子どもの持つ力を感じることができた。
- 白の持つ魅力に気付いていた。
- 自分なりのイメージを持ち、作り始め、授業者の声かけから更にイメージを深めたり広げたりしてつくっていた。
- 光（自分だけの、自由に on, off できる）は、子どもの心をとらえると思った。
- 子どもの発想の豊かさを感じた。豊かに想像・創造していた。子どもの発想の豊かさには毎回驚かされます。
- 体調がすぐれない子でも、短時間で作品をつくることができ、「やりたい」という気持ちを十分に持ちながら、作品づくりに臨めたので良かった。

に留まることなく、自分が表したいことを追求し、施行錯誤しながら主体的に活動に取り組む姿を観察することができたことは大きな成果だといえる。

・材料用具

各題材においては、身の回りの材料・用具を使用することを心がけ、提示方法や加工方法などを工夫することで、その魅力を引き出すようにした。また、生活経験が乏しい子どもたちの実態から、かたちや触感の変化が大きいものや諸感覚（触覚、視覚、聴覚、臭覚など）を十分に発揮できるようなものを豊富に準備した。さらに、図1～3の題材において、材料同士の接着方法に関して、児童生徒の弱い力でも充実した活動が期待できるような工夫を行った。

「モビール」づくりでは、木材やモール・フェルト、毛糸、紙など様々な触感や質感の違う材料、色彩豊かな材料などを豊富に準備した（図6）。表5は各題材の材料・用具に関する教員の感想をまとめたものである。表5から、充実した材料・用具の準備が児童生徒の造形活動への意欲を高めていることが分かる。活動過程では、様々な材料を手に取りながら、触感の違いや色・かたちの組み合わせなどを楽しみながらイメージを広げ、主体的に活動に取り組んでいる様子も観察できた。また、「モビール」づくりでは、材料を組み合わせる方法として、モールや糸類（刺繍糸、毛糸、タフロープなど）での結合（接着）を提案し、様々な種類（長さ、太さなど）を提供した。表5の感想からは、材料同士をモールで組み合わせながら、施行錯誤を繰り返している子の様子が見て取れる。図7は、実際にモールを使用して材料を組み合わせている様子である。乾燥の遅い液体のりやボンドなどを接着時に使用するのではなく、より早く簡単に材料を接着できれば、児童生徒の活動への意欲が低下することなく、没頭して楽しむことができるだろう。しかし、「モビール」づくりでは、児童生徒が作りたいたいのものがモールや糸類での接着に適しておらず、両面テープやビニールテープを使用して材料を接着する場面がみられた。結果として、材料の接着はできたが、様々な質感の材料を準備していたため、その接着は容易ではなく、作品の強度は弱いものになってしまった。



図6 教室内に材料を提示している様子

表5 材料・用具について

材料・用具に関すること

【モビール】

- 材料を色々付け足すだけでなく、材質を活かして変形させ、紙の中にいろんな材料を組み合わせ、独自の世界を表現するなど、教員の発想をこえたつくりかたをしていた。
- 材料の多さに驚いた。これらを準備していたために、子どもたちのワクワクする気持ちが高まったと思う。
- 一つ一つの素材が色々な表現に対応していたことや素材も夏らしいもの多くて、意欲が高まった。
- 麻布とモールを使用して、施行錯誤を繰り返しながら、満足感や達成感が味わえた。
- 選ぶ楽しさがある。豊富な材料がワクワクする気持ちを高めている。
- 病室のサイズに合わせた木の選択ができればよかった。
- 材料を選ぶ活動をとっても楽しんでた。

【サマーバッグ】

- ビニールシートを使用したので、夏らしさを感じる事ができた。
- ビニールシートにマジックで描く活動を楽しんでいた。
- ビニールのサイズも3種類あったので、サイズに合わせて描くテーマを考えていた。
- ストーリーがあったり、夏のモチーフを描いたり、自分の表現で思いきり描いていた。子どもたちが夢中になっていた。
- 描いているうちに、直線→曲線→ぬりつぶし→絵と発展していく様子が見られた。作品への愛着が深く、やりきった感があった。

【光の世界】

- スチロールカッターの使用方を正しく理解し、安全に使用することで、子どもたちの活動が活性化される。教員の心がけ次第で活動が広がることを痛感した。
- LEDとスチロールの幻想的なオブジェが良かった。
- スチロールカッターを初めて使用しました。自由に形をつくる楽しさを味わえることが分かった。

「ビニールバッグ」づくりでは、主な材料として、ビニールシートとマジック、「立体作品（ランプシェード）」では発泡スチロールなどを使用した。これらは、様々な感覚を働かせつつ、弱い力でつくったり、短時間で描いたりできる材料・用具である。ビニールシートにマジックで描く感覚はつつつとして気持ち良く、表面を滑るように弱い力でも自由にかたちが描ける。こうした材料・用具の特徴を楽しみなが

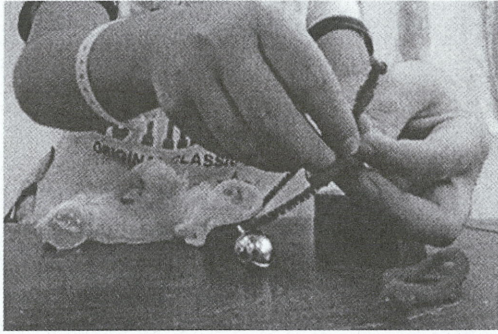


図7 様々な材料を組み合わせながら、イメージした作品をつくっている様子

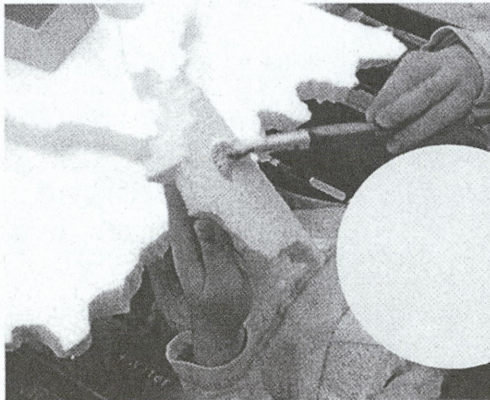


図8 自由にかたちを切り出し、接着している様子

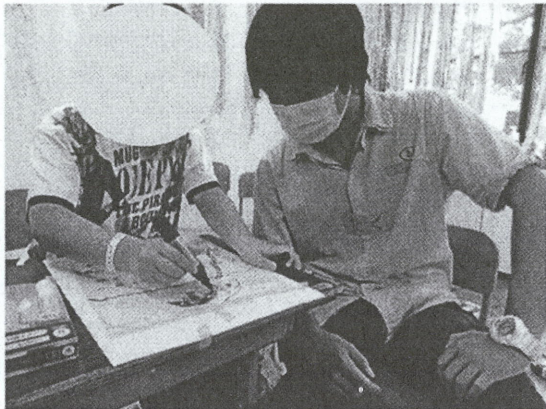


図9 学生ボランティアが子どもの製作に寄り添う様子



図10 学生ボランティアが子どもの製作を補助している様子

ら、活動に取り組んでいた子が多かった。スチロールカッターによる発泡スチロールのカットは、児童生徒の弱い力でも抵抗感なく自由にかたちをつくりことができる。スチロールカッターで発泡スチロールをきる感覚を楽しみながら、自由にかたちをつくり、できたかたちから様々なイメージを広げている子が多かった(図8)。表5からも、これらの工夫が児童生徒の意欲やつくりたい気持ちを高め、イメージの広がり大きく影響し、活動を活性化させていることが読み取れる。

「ビニールバッグ」づくりにおける材料(ビニールシート)の接着方法については、準備段階で「シーラー」の活用を視野にいれ、教材研究を進めた。前述した開発途中の教具(補助具)を使用するよりも簡単に材料を接着することが可能であると考えていた。しかし、実際に使用してみると、力の加減(長くおさえると熱でビニールが溶けて穴が開く)や手元が見えづらい(接着したい部分が接着しにくい)といった課題が明らかになってきた。実践では試験的にこの接着方法を取り入れたが、その接着は教員が担当することにした。

「立体作品(ランプシェード)」づくりにおける材料(発泡スチロール)の接着方法については、過去の実践でも扱っていたボンドを使用することにした。ただ、今回は板状、棒状、球状の発泡スチロールが準備されており、それを児童生徒がつくりたいかたちに簡単に組み合わせて接着できる方法が求められたため、ボンドの他にも竹ひごを用いることにした。接着したい発泡スチロール同士を竹ひご(ボンドを塗ったもの)で刺して固定する方法を用いた。図3は、この接着方法を用いて材料を接着した作品例である。本作品では、竹ひごを用いた接着方法により、様々な形状のかたちをつくりだすことができ、動きのあるダイナミックな作品となっている。

(2) 指導・支援について

授業実践では、現場教員や学生ボランティアと連携を行い、一斉指導及び個人指導の充実を図ることを目指した。各題材を通して、丁寧な個別指導・支援を行うことで、児童生徒の意欲を高めたり、作品のイメージを広げたり、躓きに対応するようにしている(図9・10)。授業後の現場教員の感想の中から、指導・支援に関する記述をまとめたものが表6であるが、表6からは上記で述べたきめ細かい指導・支援が子どもの関心や意欲を高めたり、作品への満足度を高めたり(技術面でのサポートなど)していることが分かる。一方で課題も明らかになってきた。授業実践の前には、担当教員が参加する事前教材作成会を実施し、教員自らが題材に取り組んだり、指導や支援方法を理解したりしているが、表6からは担当教員が授業過程におけ

表6 指導・支援について

<p>指導・支援に関すること</p> <p>【モバイル】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○子どもの思いを実現するための方法やアドバイスの難しさを感じた。 ○作品のイメージと合わせた素材選びのアドバイスについて、難しさを感じた。 ○事前教材作成会の際、担当の子どもの実態にあった活動を予想しながらつくっていたが、本番で子どもが選択した素材に対してどのような活動ができるのかをイメージする力が自分に足りないと思った。沢山の引き出しを準備しておかなければいけないと痛感した。 ○授業者や学生ボランティアの子どもを指導、支援する姿に感動する。 <p>【サマーバッグ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○学生ボランティアが子どもへアドバイスをしてくれたので、安心して作品づくりに取り組んでいた。 ○授業に参加することで、支援の仕方を学べた。 ○描画指導について、声かけや支援が難しいと思った。授業者の支援や言葉かけが参考になった。 <p>【光の世界】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○学生ボランティアの子どもへ対するきめ細かい対応が良かった。 ○事前教材作成会で教員も活動内容を理解していると、積極的に指導できるので良かった。 ○体調などがすぐれない子ども、授業者や学生ボランティアの丁寧な説明や適切な助言のおかげで、頑張ることができた。

る声かけなどに依然として課題を感じていることが分かる。こうした課題解決のためには、事前教材作成会の実施内容の更なる見直しが必要である。担当教員が課題としてあげている事項の分析をもとに、その解決に向けて対策を練っていく必要がある。

(3) 教室環境づくりについて

これまで、教室環境の工夫を行ってきた。普段とは異なる教室の雰囲気は、子どもの活動への意欲を向上させてきた。本年度は、題材のテーマに合わせて、天井からタフロープや透過性のある布などを飾ったり、題材に関係のある写真や参考作品（複数）を教室内に掲示・設置したりした（図11）。表7を見ると、こ

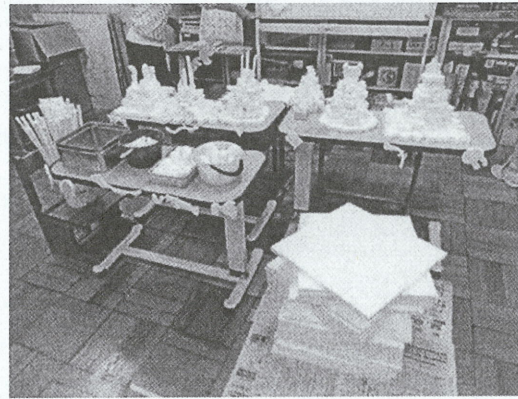


図11 教員が製作した参考作品を教室内に展示している様子

表7 教室環境づくりについて

<p>教室環境づくりについて</p> <p>【モバイル】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○教室内の飾りがあり、いつもの教室が違う空間であるかのように感じられた。環境設定だけでも子どもたちの心をとらえられたと思う。 <p>【サマーバッグ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○夏をイメージした絵を準備して、描く際の資料にしてもよいと思った。 ○掲示の効果で夏をテーマに絵が自然に描けていた。 <p>【光の世界】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○授業以外で作品づくりを行った子どもへの、環境設定やイメージを持たせることの難しさを感じた。
--

うした教室環境が子どもの活動への意欲を高め、作品に影響を与えていることが分かる。

教室へ入ってきた時、普段と雰囲気が違う教室の様子に製作意欲がかき立てられている様子や参考作品をじっくりと観察しながら自分の作品のイメージを膨らめている様子が印象的であった。弧をえがくようにセッティングした机の配置は、子どもが互いの作品を鑑賞するのに効果的であった。この机の配置は隣に座っている友達の作品だけでなく、色々な友達の作品が見やすくなる。鑑賞を通して、気になった友達の技法や色遣いを試してみたり、作品づくりのイメージが広がったり、意欲が高まったりする様子を確認することができた。授業実践では、教室環境設定の重要性を再度確認した。

(4) 事前教材作成会の実施について

本題材の実施前には、担当教員と事前教材作成会を

実施した。事前教材作成会は「きらら学級」で実施している。この実施目的は、担当教員の題材や実践への理解（目的確認、参考作品製作、知識技能獲得など）を深めている。ただ、前述したように、担当教員は、依然として授業過程における指導・支援に関する課題を多く抱えており、今後はこの解決が課題となる。担当教員の課題解決に繋がるような事前教材作成会の在り方を検討していく必要がある。

8. 結語

本稿では、2013年度の「きらら学級」における授業実践の概要及び成果と課題について、実施した造形教材の「授業計画」「テーマ」「材料・用具」「指導・支援」「教室環境」の視点から報告してきた。児童生徒の意欲を高めつつ、想像を豊かに広げ、表現することの楽しさや喜びを感じることでできる授業づくりのためには、以下の成果と課題が示された。授業計画については、短期間・時間での授業実施（1日1題材）が効果的であるが、短い授業時間の中で、表現と鑑賞のバランスを如何にとっていくかが今後の課題となる。テーマについては、季節感を取り入れながら、用途（飾ったりつかったり）のある題材が、病弱の児童生徒が表現を楽しみ、喜びを感じるために効果的であった。また、完成した作品を病棟や病室で使用することで、児童生徒と他者とのコミュニケーションを促進するきっかけにもなっていた。今後も「つかう」をキーワードにして、造形教材の開発に取り組んでいきたい。材料・用具については、身の回りの材料・用具の選択、児童生徒の実態にあった材料・用具の選択、提示方法や加工方法の工夫などが重要であることが示された。また、児童生徒の造形活動促進のためには、作品づくりで重要なポイントとなる「材料の接着」について、児童生徒の実態にあった材料・用具を検討することが重要になる。しかし、今回材料接着のために用いた材料・用具及び方法の中には、児童生徒の実態に合わない点もあったため、材料・用具、方法については、更なる吟味が必要になってくる。指導・支援については、きめ細かい個別指導や支援が児童生徒の関心や意欲を高めたり、作品への満足度を高めたりしていることが分かる。一方、担当教員が授業過程における声かけなどに依然として課題を感じていることも分かった。この課題解決のためには、事前教材作成会の実施内容の更なる見直しが必要である。担当教員が課題としてあげている事項の分析をもとに、その解決に向けて対策を練っていく必要があるだろう。

報告してきた成果と課題をもとに、課題解決にむけての手立てを今後も検討していきたい。同時に引き続き、身近な材料や用具に目を向け、子どもの実態に合った魅力あるテーマ設定を行いながら、題材開発に取り組んでいき、病院内学級における造形教材開発の

視点や指導方法などのソフト面の検討・蓄積に取り組んでいきたいと考える。

謝辞

授業実践にあたり日頃から大変お世話になっている訪問教育「きらら学級」の先生方に心より御礼申し上げます。

註

- 1) 文部省「病弱児指導事例集—実技を伴う教科の指導—」ぎょうせい, 1987, p. 8
- 2) 門司美鶴「入院中の児童の図画工作における教材・教具の工夫について」全国病弱教育研究会研究交流誌『病気の子どもと医療・教育』vol. 8 no. 2, 2000, pp. 18-29
- 3) 教育と医学の会「教育と医学」慶應義塾大学出版会, 2001, 第49巻12号, p. 16
- 4) 内田裕子 高橋智子「美術科教育の意義を理解するための教師用ワークシートの作成—2004年度教育センター研修用資料作成を手掛かりにして—」大分大学教育福祉科学部附属教育実践総合センター紀要第22号, 2004, p. 111
- 5) 文部省「病弱児指導事例集—各教科の指導—」ぎょうせい, pp. 8-12
- 6) 病院内には、訪問教育「きらら学級」のための教室が一部屋設けられている。この教室には、学習机や黒板、水道、造形活動に使用する画材（はさみ、マジック、絵の具、画用紙など）などが備えられている。
- 7) 高橋智子「病院内学級の児童生徒のための造形教材開発—造形教材開発の視点に関する考察—」『大学美術教育学会誌』41号, 2009, pp. 135-142
- 8) 2013年度は、本稿で報告している実践に加え、1~3月にも授業実践を予定している。
- 9) 熱を利用してポリ袋などの閉じ口を密着させて封じる機械のこと。
- 10) 高橋智子「病院内学級での造形活動における教具（補助具）の試作Ⅰ」第51回大学美術教育学会全国大会（大分大会）概要集, 大学美術教育学会, 2012, p. 57